

自閉スペクトラム症における「つながり」に関する一考察

文山 知紗

1. はじめに

DSM-5で自閉スペクトラム症とは、基準A「複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」と基準B「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」が基準C「症状が発達早期に存在」(American Psychiatric Association, 2013)するとされている。この基準の元を作ったのはWing(1996)であり、彼は自閉スペクトラム症を、①社会性の障害、②コミュニケーションの障害、③想像力の障害という3つの特徴を持つものと提唱した。当初は言語障害が病態の中心と言われていたが、1980年代後半には社会性の障害であるといわれるようになった(小野ら, 2010)。平井(2016)によると、「自閉症は、人間の基本的な条件である、他者とのつながり、そして自己の存在基盤自体が脅かされているようにみえる状態」(平井, 2016, p.304)と述べられている。現在では自閉スペクトラム症の特徴を捉える用語として、主体や共感性、ミラーニューロンなどが用いられている。それらの共通点とは、対人関係の特異性だと考えられるが、平井(2016)の論を用いるのであれば“つながり”の脆弱性ともいえるだろう。

文山(2020)は、発達障害と風景構成法の研究を概観し、発達障害者らの風景構成法にはどのような特徴が表現されているかを見ていった。そこでは主体の弱さや、外界とのつながりの薄さも散見されたが、部分的にであれば他者とつながることができたり、独特のつながりを形成したりする点も発達障害を理解していく中での重要な点ではないかと述べた。ゆえに本稿では彼らの特徴を“つながり”という視点から見ていきたい。ただしこの論考においては、発達障害の中でも、コミュニケーションや社会性、様々なつながりという点で問題を呈しやすいと考えられる自閉スペクトラム症に注目することとする。

本稿における“つながり”についてもここで述べておきたい。本稿においては、対人関係における“つながり”、外界との“つながり”、自身との“つながり”の3点に注目していく。対人関係における“つながり”とは、どのように他者と関係を持ち、どのように他者と関係を構築していくのかということである。コミュニケーションの障害を有しているということは、他者との関係は築きづらい。しかし他者と全く関わらずに生きていくことは不可能であり、独特な関係性を構築していると考えられる。本稿では、独特の関係性の持ち方、関係の構築を“つ

ながり”という言葉で表現していく。外界との“つながり”とは、彼らが所属する集団にどのように関わっていくか、ということを主に示す。社会性の障害を持つ彼らにとって、集団に入ることは困難が生じやすい。彼らが“社会”や“集団”をどのように捉え、どのようにつながっていくのかについて考えていきたい。最後に、自身との“つながり”とは、彼らがどのように自分自身の感覚を捉え、自身から生じて感覚をいかに表現するかということを表す。自身の外部感覚と内部感覚の“つながり”や、思考と行動との“つながり”について考えていくこととする。

つながりが難しいと様々な困難に出会いやすく、何らかの支援が必要なことも多いと考えられる。自閉スペクトラム症の心理療法についてはその賛否は分かれているものの、自閉症の支援に取り組み、一定の成果を上げてきた分析家の理論を再度見直すことは、今後にも有用であると思われる。よって今回は、自閉症の支援に取り組んできたことで有名な分析家たちの理論や、自閉症という概念の発見に寄与したと思われる理論を、筆者が重要だと考える“つながり”という観点から見直すことで、自閉スペクトラム症の新たな見方を提供することを本論の目的とする。また理論からのみでなく、自閉スペクトラム症の当事者が書いた本を事例的に検討することで、彼らが語る自らの特徴を“つながり”の観点から考察することが第2の目的である。

2. 精神分析と自閉スペクトラム症

2-1 Donald Meltzer の理論一次元性と付着同一化一

自閉症児のプレイセラピーを行ったことで有名な人物と言えば、Donald Meltzer だろう。Meltzer (1975) は、自閉症の特徴を、経済論、構造論、力動論、発生論に分けて以下のようにまとめた。経済論的要因の特徴として、Meltzer (1975/2014, p.12) を引用しておく。

彼らの心の過程はきわめて敏速に働く。反復性が優勢な時ですら、同じ空想の基本形が次々と結合したり置換されたりして展開していくその速さは、めくるめくばかりである。身体と外界とから彼らがこうむる感覚情報に対する脆弱性は、吹きっ曝しの無防備な器官という印象を与える。結果として、環境の細部やその細部の変化を識別する彼らの能力は、恐るべきものとなる。

彼らの感覚に対する敏感性はすさまじく、それゆえ、環境の細部やその細部の違いを識別する能力には長けている。しかし、その識別の能力ゆえに、情緒的にも揺らされやすく、様々なことに敏感に反応しやすくなる。さらにそのことは他者の感情に浸透されやすい性質に関係し、他者の苦痛に気づくことは爆撃を受けたように経験することになるという。他者からの情緒感覚や情緒刺激に対してとりわけ無防備な彼らは、自身を危険やそういった刺激から守ってくれるような母親対象を独占するために、すべての競争相手を追い払おうとする。断固として独占した母親対象に対して彼らが求める「肌と肌との表面の親密さは、飽くことを知らず強欲的なものになりがち」(Meltzer, 1975/2014, p.13) で、反復強迫はここから生じると述べられている。彼らの境界が薄いために、エネルギーとしての刺激が際限なく注力されることになり、それを避けるための反復強迫が生じるのだろう。

次に構造的特性について Meltzer (1975/2014, p.15) は以下のように述べている。

その心の働きは他の心の事象とのつながり (linkage) を持ちえないという特性を持っている。この最後の特性を言い表すために、「事象」は不連続に分離したものであり、[心の]つながりには利用できず、そのため想起にもまったく利用できないと仮定して、私たちは「事象 (events)」と「経験」との間に区別を設けたいと思う。

さらに力動論的側面は、「自閉状態にある子どもを、再び転移的な交流へと回復させるために、一時停止した注意を再活動させる能力が治療者には必要である」(Meltzer, 1975/2014, p.19) と述べられている。

最後に発生論的考察のなかでは、ある一つの対象 (母親の乳房) を魅力的なものとして、そこに注意を寄せ集めることで、バラバラになった自己をまとまりのあるものにしてののだと考察している。

上記をまとめてみると、自閉スペクトラム症とは、感覚的な敏感さと俊敏さを持ち合わせることで、無防備な状態から逃れるために、「反復強迫」という現象を用いるのだろう。ただし、ここで用いられている「反復強迫」とは Freud が提唱した「苦痛にみちた体験や人間関係を強迫的に反復すること」(中久喜, 2002, p.402) だけではなく、現代でいうところの常同行動や興味の限界が引き起こす“こだわり”を意味すると考えてもいいのかもしれない。つまり、自閉症的な行動特徴とは、バラバラになる自己をまとめ上げるための行動であり、その心的構造は、経験を積み上げたり、他者とつながったりするものにはなりえないのだろう。

また Meltzer (1975) が理論化した自閉スペクトラム症の特徴の中で重要なものとして、「付着同一化」が挙げられる。付着同一化とは、「対象の自立した存在が認識されることのないしがみつくようなタイプの依存をつくりだす」(Meltzer, 1975/2014, p.257) 状態と定義されており、自閉スペクトラム症の人が抱える特有の不安と、その不安からくる関係の持ち方を表現していると言えるだろう。もう少し言い換えると、目には見えない“こころ”というものの理解の仕方が特異な自閉スペクトラム症の心的世界は、二次元的な性質をしており、身体接触などの物理的な接触や、表面に見えるものをそのまま模倣することでしか、他者とつながることができないのだと考えられる。

Meltzer が提唱している「次元性」についても、ここで説明を加えておく。一次元性とは、閉じた時間であり、情動性が関与する世界ではなく、「満足と対象との融合は未分化」であると Meltzer (1975/2014, p.253) は述べている。「中核的自閉症状態の臨床像は、実質上無思考状態、つまり記憶や考えに利用できない出来事の連続からなっている特徴がある」(Meltzer, 1975/2014, p.253) としている。つまり一次元性とは、満足感や不快感などの情動と、満足あるいは不快感を与える対象とは未分化であるということであり、自他ですら密着した状態であると考えられる。二次元性とは、記憶と欲望、あるいは見通しの能力の両方が損なわれている状態であり、時間については本質的に円環状で変化を心の中に抱くことができない。それゆえ無変化状態を脅かす出来事は、表面の破綻を招き、崩壊させるものとして、痒みや知覚麻痺などのぼんやりとした皮膚感覚として経験されると言われている。三次元性とは、「対象が包容機能を持つ可能

空間 (potential space) を有し、同一化を通じて自己も包容機能を持つ可能空間を有する」(Meltzer, 1975/2014, p.254) のだとしている。可能空間 (potential space) とは、ウィニコットの理論における鍵概念のひとつであり、「乳児と母親のあいだ、個人の内界と外界のあいだ、空想と現実のあいだに広がる、潜在的 potential であるが可能性 potential をはらんだ仮説的な体験領域」だと藤山 (2002, p.69) は説明している。無思考状態で時間と距離の区別がなかった一次元性、円環状で漠然とした永続性に至った二次元性を経て、三次元性では方向性を獲得し始める。それが四次元性に達すると、自己愛に対する苦悶が開始され、新しい型の同一化の過程をもたらすことになり、それは発達の一つの可能性として見るのであり得るのである。これらの次元の中において自閉症の子どもたちは、一次元性と二次元性の最中にいると示唆されている。

以上を“つながり”という観点から考察し直してみると、そこには他者とのつながりがないというよりは、適切な空間や距離を持ってつながることができず、“間”ができてしまうことで原初的な恐怖や不安に襲われてしまうとも捉えることができる。よって、完全に密着した形になったり、対象にくっついてしまったりすることで関係を作ろうとしているかのようである。エコラリアという現象や、TV や CM などをもそのままろさむ行為も、まさにそれと重なるところがあるだろう。長野 (2013) が発達障害者の風景構成法について、そのとき教示されて描いているものに自分になってしまうことや、自分の内界からではなくどこか他のところにあるものを模倣するなど、自他の別が漠とした自己意識の在り方になっていると述べている。自分のイメージを介在させることなく、目の前にあるものをそのまま描くという行為は、描画や自身、また外界と適切な距離を持つことができず、外とのつながりを「模倣する」という形でしか表現できないことの表れなのだろう。

Meltzer が二次元性の段階で述べていた「皮膚感覚」については、Bick (1968) が「二次的皮膚 second-skin」の理論として述べているものが理解の参考になるだろう。Bick によると皮膚は、赤ん坊などの未統合な者における原初的な“つなげるもの”の役割を果たし、それは身体から分化されていないパーソナリティを1つにまとめる機能をもつという。パーソナリティとしてひとつにまとめられるためには、境界としての皮膚機能が重要である。その皮膚機能を取り入れるためには、母親からの授乳や抱っこをして話しかけてもらうという体験が必要になってくる。それらが何らかの事情でうまく提供されない場合には、「二次的皮膚」の機能が発展してしまい、不適応へと導かれてしまうと考察されている。自閉スペクトラム症者らは、感覚に特殊な特性を持つ者が多い。上記の Bick の論とあわせて考えると、そのような生得的な皮膚感覚の特殊性が、“つながり”自体を持ちにくくしているのかもしれないし、“つながり”の持ちにくさ自体が特殊な感覚過敏や感覚鈍麻を構築しているのかもしれない。いずれにせよ、「皮膚」という、現実における外界との接触や感覚としての“つながり”を持つ部分についても、特殊な感覚を有していることは念頭に置いておくべきだろう。

2-2 Frances Tustin の理論—自閉対象と身体的分離—

英国の子どもの精神分析的な心理療法家である Frances Tustin は、教師経験のあと、ロンドンのタヴィストック・クリニックにおいて、クライン派の子どもの精神分析的な心理療法の訓練を受けた。訓練終了後、自閉症児の治療で有名な施設での勤務時に、彼らに強い関心をもちはじめ

める。その後、自閉症児への精神分析的心理療法に深く関わっていき、独自の自閉症論と精神分析理論を構築していった。Tustin の主要な理論だと考えられるのは、「自閉対象」と「身体的分離」であり、また自閉症の種類を「殻タイプ」と「アメーバタイプ」と分類した点で重要な示唆をもたらしたと言えるだろう。

「自閉対象」について、Tustin (1972/2005, p.73) は以下のように述べている。

(a) 子ども自身の体のさまざまな部分

(B) 自分の体であるかのごとく子どもによって体験される外界のさまざまな部分

またその機能については、Tustin (1972/2005) が以下のように言及している。

子どもは移行対象を体から切り離されたものとして区別するが、自閉対象はそうではない。自閉対象の機能は「自分でないもの」に対する気づきを完全に取りのぞくことである。なぜなら、それは耐えがたく恐ろしいものであると感じられているからである。(Tustin, 1972/2005, p.77)

外界のほとんどの対象は自閉対象であり、それは分かちがたく「自分」と完全に結びついているのである。(中略) そのため、言葉を用いないか、あるいは他者の言葉を繰り返し反響する。その場合、「自分でない」言葉は、主体自身の口の一部であり、それゆえ「自分」になるという妄想は維持される。「自分でないもの」の気づきを避けるために認知機能も用いない。完全に「自分」の体の中身である自閉対象は、脅かされる「自分でないもの」を寄せ付けないものである (Tustin, 1972/2005, p.78)

つまり、自閉対象とは移行対象と重なる部分もあるが、それ以上に密着したものである。そして自閉対象は「自分」を発見していくという発達段階を阻害するものとなる。これを「つながり」という観点から考えていくと、自閉スペクトラム症者はあらゆる外界の“モノ”と密着し、分離しえない環境にいると考えられる。いわば、つながりすぎる状態だろう。“モノ”とは記載したものの、それにはおそらく“ヒト”も含まれており価値や優劣はない。優劣が存在するためには空間ができ、客観的に見る視点が重要になってくるが、そのような視点も生まれにくい。ある種の“つながり”自体はあるものの、密着するものに特別な意味や情緒は含まれていない可能性が考えられる。つまり、自閉スペクトラム症者の構築する“つながり”は、健常者が感じる情緒的なつながりとは異質になる。よって健常者は、彼らとのつながりに奇妙さを感じるのではないだろうか。

最後に Tustin (1994) が提唱した自閉症のタイプについて論じておく。自閉症児はその多くが、身体や動き自体が硬く、堅い殻に閉じこもっているカプセルに入ったものだと思われていたが、逆に身体が柔らかく、ぐにゃつとしたような状態の症例をポスト・クライン派の Alvarez が報告した。Tustin は前者を「殻タイプ」後者を「アメーバタイプ」と表現した。

アミーバタイプは、恐怖心に怯え無防備でありながら、その受動性と無関心さによって、他者や外の世界からは隔絶されていたとも述べている。多田(2012)は、「殻タイプ」の子どもは、「自分」と「自分でないもの」とを過度に分化させていて、「自分でないもの」を締め出し、子どもと外界との間に障壁を作り出すのだと言及している。それに対して「アミーバタイプ」では、様々な違いへの気づきはあいまいで未分化なままにされ、関わりは防衛を強固にするために関係しているふりでしかないかとまとめている。これもつながりのタイプとして考えることができ、「殻タイプ」は文字通り「殻」であることから、つながりにくく、むしろつながらないことで自分を守ろうとしているものと考えられる。それに対して「アミーバタイプ」は、過度にくっつくことでつながりを持つとするものの、そのつながり方は特異なものとして感じられてしまうのではないだろうか。

3. ユング派と自閉スペクトラム症

3-1 Carl Gustav Jung の理論—内向と内向的思考型—

Jung の時代には、自閉症という概念は確立されていなかった。Kanner によって報告された最初の症例が 1943 年だからである。しかし、Asperger,H. (1944) が Jung,C.G.の内向性パーソナリティを挙げて、「内向性とは、それが自己の局限であり、環境との関係の挟まりとすれば、本質的には自閉症と言ってよいでしょう」(Asperger, 1991/1996, p.177) と述べている。また加地(2012)は自閉症の発見のためには、Jung が提唱している内向的思考型 *Introvertierten Denktypus* の特徴も重要であると述べていることから、「内向」と「内向的思考型」について以下にまとめておこうと思う。

Jung,C.G (1921) は、内向型の特徴を、自らを方向づける際には「主として客体や客観的事実を基準にするのではなく、主観的要因を基準にする」(Jung,C.G, 1921/1987, p.402) と言い、基準となる主観は客体が意識的に過小評価されているにもかかわらず大きな不安をもたらす。また、内向型の人は、その不安から逃れ、安心感を得るために「儀式体系」を自分の周りにめぐらしているという。ところがそうすることで、内向型の人は客体とまったく隔絶してしまう。これは、現在言われている自閉スペクトラム症の、なかなか外界に意識がいかず、精神内界に閉じこもってしまうような特性に類似すると思われる。さらに「儀式体系」とは、現在言及されているこだわりに近いだろう。Jung,C.G. (1921) が述べている内向型の人は客体とまったく隔絶してしまうという部分は、筆者が述べている“つながり”の断絶の一種だとも考えられる。Jung,C.G.はそれを他者にのみこまれてしまうような不安からくるものとしており、前述した分析家である Tustin の論とも似たところがあると思われる。

さらに関根(1992)がまとめている内向的思考タイプの記述には、「外的な事実よりも内的な見解に関心を払うタイプ。このタイプは非常に独創的な新しい見解を導き出す能力をもっているが、この傾向が過剰になると、現実とのつながりが薄れてしまいやすく、他人に理解できないひとりよがりな見解をふりまわすことがある」(関根, 1992, p.173) と述べられている。この記述を見ると、自閉スペクトラム症の特性と内向的思考タイプとは重なるところがあるように思われる。たしかに、内向型の性格傾向は神経症を前提としており、その点では全く違うものであり、普段からこの傾向が常に過剰なわけではないだろう。ただし外から見える状態像とし

ては重なってみえるところがあると考えれば、自閉症スペクトラム症も内向型の人も決して現実とのつながりが切れるわけではないし、そもそもつながりを持っていないわけでもない。しかし現実とのつながりは薄れてしまいやすい点があり、そうなる则他人に理解できない思考が生じやすいのだろう。これも一般的な思考と自閉スペクトラム症当事者が持つ思考のつながりとの差や、当事者が抱える思考自体のつながりに特異性があるためだと考えられる。

3-2 河合らの理論—主体と自閉スペクトラム症との関係—

また文山（2020）でもまとめたが、近年 Jung 派で、かつ発達障害の研究を長年積み重ねてきた河合や田中は、発達障害について、主体のなさや主体の弱さが一要因としてあると言及している。河合・田中が言及している「発達障害」は、社会性の問題が中心になっていることから、主に自閉スペクトラム症についての議論であると考えてよいだろう。河合（2010）は自身の臨床経験やその観察から、自閉スペクトラム症の子どもが自分のことを自分の名前前で呼ぶことを取り上げて、主体の弱さについて考察している。主体とは、実体のないものであり、その主体の成立には、自分を他のものとの並立として具体的に存在する「Aちゃん」（自分の現実の名前）を否定する必要がある。それができることによって皆が共通して使う、実体のないものとしての「私」という視点が確立されるという。さらに主体は客体との関係にあるように、「常に他者との関係で成立する」（河合，2010，pp.14-15）もので、それが自他の区別と関わってくる。そこから河合（2010）では、主体と言語との密接な関係性について述べ、鏡像段階を経ることで主体と言語が成立し、自己関係・自他関係が構築され、「自分と自分、自分と他者の差異」が生じてくることに言及している。

上記の理論から河合（2010）や河合・田中（2013）は、自閉スペクトラム症は主体がないからこそ、言語が成立してこず、また主体がないから他者との関係が成立しないと述べている。さらに関係が成立しないことによって、他者の気持ちを理解することが困難になり、自他の区別ができないことで自他境界が曖昧になってくると説明している。自閉スペクトラム症の特徴と言われるこだわりは、何か決まった物や、何か決まった行動が主体の代わりであり、定点を作り出すものになっているため、そのこだわりを奪われるとパニックを起こすのは、定点をなくすためだとされている（河合，2010）。

この理論においては、言語の役割と自閉スペクトラム症についても重要な観点であるとされている。言語と自閉スペクトラム症の関係について研究されたものは、発達心理学的な観点や言語研究の中で多数存在する。例えば、佐竹・小林（1987）では、自閉症児の終助詞表現について言及している。終助詞の役割を「会話のつながりをなめらかにし、微妙なニュアンスを加える」としており、先行研究をまとめる中で自閉症児は「社会的に相互作用的な伝達機能について著しい遅滞を示すことが示唆された」とまとめている。また伊藤・田中（2006）は、自閉症児が指示詞（コ・ソ・ア）をどのように理解しているかについて検討しているが、「言語のみで指示対象を特定するといった状況で、曖昧情報を補うために実験者（話者）の顔の向きや視線を手がかりにすることも、指示対象特定に迷うことも、自閉症児は定型発達児に比べ少なかった」と述べている。これらのことから、彼らの持つ言語は健常者との適切なつながりを形成することが困難であり、また言語だけでは適切に他者とつながることが難しいことが示唆され

る。しかし、伊藤・田中（2006）の論を言い換えれば、言語だけでは他者と適切につながるものが難しくても、ジェスチャーなどの視覚刺激等の、言語以外の情報を使用することでつながれることもあると言えるだろう。

4. 事例検討—当事者本を用いて—

翻訳家のニキ・リンコさんは、30代になってからアスペルガー症候群と診断された。また作家の藤家寛子さんは20代前半でアスペルガー症候群と診断されている。2人の対談形式で展開される著書「自閉っ子、こういう風にできてます！」（2014）では、第1部で身体感覚、第2部で世界観、第3部で生活上の工夫について述べている。各部での独特の感覚から、自閉スペクトラム症における“つながり”の特異性について考えていきたいと思う。

まずは身体感覚についてである。身体感覚についてニキ・リンコは身体機能の多くをマニュアル作業でこなさなければならぬしんどさを挙げている。嚥下や歩行など、いわゆるふつうの人がオートマティックにこなしている作業を彼らは、一つ一つの作業を考えながら、時にその方法を忘れて混乱したりしながらこなしているという。そこには、見えないものは、「ない」という背景がある。コタツの中に入っている脚も見えないと、いつの間にか感覚が乏しくなり、立ち上がることにできなくなるのだと語る。傘と腕がくっついてしまって、区別がつかなくなる感覚もあれば、関節同士の接続が意識していないとできなくなることがある。「筋肉が緩んだりしたら全身バラバラになるので」（ニキリンコ・藤家寛子，2004，p.50）との記載にもある通り、これらはまさに自分の身体と自分自身のところとの“つながり”がうまく機能していないところが表れているのだろう。自分の身体感覚は、“自分”というものをつかみ、“自分以外の世界”をつかんでいくための重要な手掛かりとなっていく。つまり世界を広げていくための基盤になると同時に、他者と関係性を持ち、つながりを築いていくための重要な基盤になると考えられるが、自分の身体と内的な感覚の“つながり”すら、意識して持てないということは、他者との“つながり”を十分に築いていくことは困難を極めると思われる。

自閉スペクトラム症の人が持つ世界観は、上記でも述べた身体感覚が大きな影響を与えているようである。第2部では、身体感覚の「自動運動との連絡が悪かった」（ニキリンコ・藤家寛子，2004，p.114）と語るニキだが、自分が歩いているのか、学校が来ているのかわからなくなることがあったと語っている。藤家は自分のことを「白い魔女」だと思っており、ニキはクラスメートは教室の備品だと思っていたと対話で述べている。出版社の人は「出版社」という役割の人であり、その人がそれ以外の顔、例えば家庭での顔を持つとは考えられないニキは、クラスメートは学校にいる人たちであり、自分がそこに存在しない場合には、ふと消えるように感じていたとも語っている。いわゆる想像力の問題とも考えられるが、自分にも色々な顔があるように、他者にも色々な顔があるという思考のつながりが難しいともいえるだろう。藤家が自分のことを「白い魔女」だと考えていたのは、自分が生きている世界はシルバニア・ファミリーのような世界で、その世界を大きな巨人が上から覗いていると思っていたからである。そして、巨人がとても高性能のコントローラーで自分たちを動かしているが、それを知っているのは自分だけだから、自分は「白い魔女」なのだと言っている。藤家にとって、他の人が知らないことを知っている点で自分は「魔女」という他者とは違う存在であり、さらに「良い人」

という意味での「白い」という言葉が用いられている。「良い」ということを「白い」と表現したり、自分が「魔女」であると考えたりすること自体が、独特の思考の“つながり”であるといえるだろう。

こういった考えを持つことで、通常の社会においては「変わった人」、「変な人」と見られがちだろうし、それを言葉にしてしまえば共感は得られない。日常世界では受け入れられにくいものであるがゆえに、想像力の障害と言われてしまう側面はあるが、そこに隠れている“つながり”をじっくり聞いていくと、ユニークなものが出てくる可能性もあるだろう。また他者とのつながりについて直接書かれている章はないものの、藤家が父との関係についてまとめている箇所がある。父親という概念を知った藤家は、少しずつ父との関わりをもつようになったが、それまでは「八時になると家を出ていく人で、たまに突然帰ってきては出て行き、“ただいま”と言いながら、夕方六時ごろ帰ってきて、私が宿題をしている間に寝ているので、私との共演が少ない配役」（ニキリンコ・藤家寛子，2004，p.166）でしかなかったと書いている。「彼が自分とどのようにつながっているのか理解できていなかったの」（ニキリンコ・藤家寛子，2004，p.166）とも書いており、人とのつながりの難しさについて述べている。ふつうの人が自然と学んでいく“つながり”や関係というものは、目に見えず、想像で補うしかない。それをあえて学んだり、考えたりすることで、つないでいくこともできるのが自閉スペクトラム症の強みであり、特異性だと思われる。

第3部では、生活上の工夫について述べているが、そこでは没頭性や視野の狭さとともに、その対応として場所の「区別」の必要性について書かれている。没頭性については、こだわりと言われる部分と重なる箇所であり、気になったところはとことん気になってしまい、そこにばかり目がいく様子が描かれている。ふつうの人が、様々な側面やたくさんの箇所を薄い全体的なつながりを持つ一方で、自閉スペクトラムの人たちは、部分的にかなり深い部分と“つながり”を持つと考えられるだろう。

本章では、ニキリンコさん・藤家寛子さんの著作より、自閉スペクトラム症の人たちが抱える“つながり”の特異性について考えてみた。そこには、自分の身体とこころのつながりの不全、思考のつながりの独特さ、他者とのつながりの難しさ、物事における部分的で深いつながりのありようがみてとれた。

5. まとめと今後の課題—「つながり」という視点からみえてくること—

本稿では、これまで言われてきた自閉スペクトラム症の捉え方に関する理論を“つながり”という視点で見直してきた。彼らは、一般的に健康的であると言われるような適切な“つながり”は持ちづらいために、学校現場や職場で不適応を起こしやすいと考えられる。しかし、そこにある“つながり”は断絶されていたり、全く存在しなかったりするわけではなく、極端に密着したあり方や、独特なつながりを用いる在り方が見て取れた。

ここまで見てきたものをまとめると、図1のようになると考えられる。

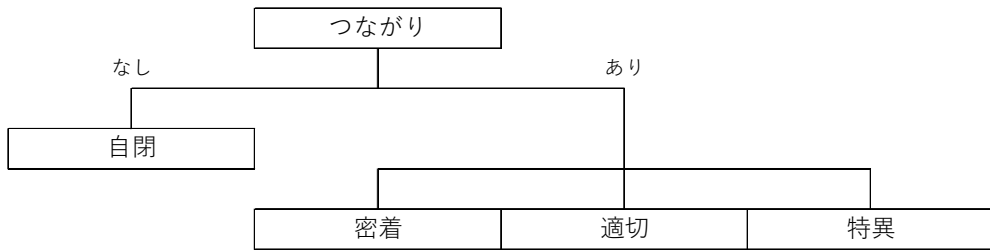


図1 つながりの種類

まず“つながり”がないというのは、Jungの内向型やTustinの「殻タイプ」と類似する。ほとんどつながりを構築することができず、自分の精神内界に引きこもってしまう。図2の①に見られるように文字通りの「自閉」状態となる。次に“つながり”がある中には3種類が考えられる。1つめはMeltzerの付着同一化やTustinの「アメーバタイプ」が示すような「密着型」である。図2の②のように、対象との距離を極限まで近づけ、あわよくばくっついてしまおうとするものである。目の前のものをそのまま模倣しようとしたり、そのもの自体になろうとしたりする。2つめはいわゆる健常の人に該当する適切なつながりであり、自己の境界を持ち、ほどよい距離感で他者と関係を築くことができる。これは図2の③にあたる。そして最後が“特異なつながり”であり、図2の④に示されるものである。これはTustinの自閉対象や河合らの主体の問題が関係してくるだろう。4章の事例で考察したものを合わせて考えると、つながりの特異さとは、自分の身体とこころのつながりが不完全だと考えられる。さらに思考自体のつながりが独特な状態だといえる。これが外側、つまり対人関係の場に出てくると、エネルギー量が相手の人と異なったり、意識を向ける方向に違いが生じたりして、双方向のスムーズなやり取りが難しくなるのではないだろうか。

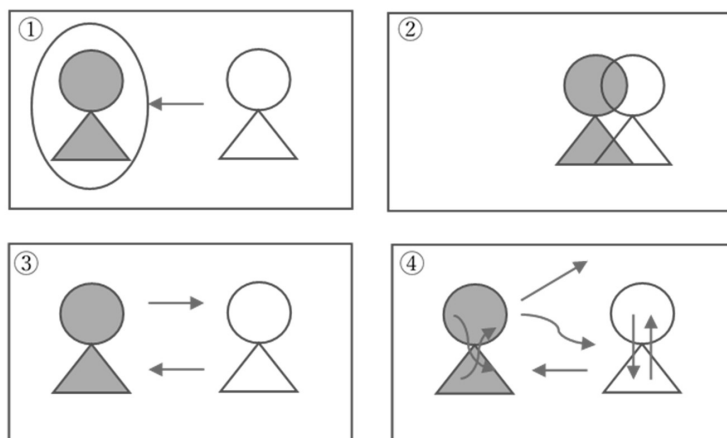


図2 つながりの4パターン

身体とところのつながりの持ちづらさについては、様々な領域で支援が必要となってくるだろう。思考が独特なつながりを持つことに関しては、心理療法という支援の中で、いま何を考えていて、それが世間とどの程度ズレているのか、あるいはどの程度許容されるのかを考えていくことが、彼らの適応に役立つのかもしれない。他者とのつながりの難しさに関しては、身体とところのつながりができ、思考に関する世間とのつながりのズレを認識していく中で、どこで折り合いをつけるか、どのように周囲に理解してもらうかを考えていくことによって、適切なつながりが育まれていくこともあるだろう。さらにある物事について部分的で深いつながりを持つことができる点は、彼らの心的世界においてそのものを極めていくことになる。これは彼らの強みとなる部分であると思われる。

上記のような様々な“つながり”にアプローチする支援を行うことは、一定の意義があると思われる。しかし、本稿はあくまで理論を整理して論じていることであり、実証的な研究を行ったわけではない。今後は様々な観点から、自閉スペクトラム症と“つながり”について考えていくことが必要だと思われる。

6. 引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Asperger, H. (1944). *Die 'autistischen Psychopathen' im Kindesalter*. *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten*, **117**, 76-136.
- (アスペルガー, H. (1996). 子どもの「自閉的精神病質」 フリス, U. (編) 富田真紀 (訳) 自閉症とアスペルガー症候群 (pp.83-178) 東京書籍)
- Bick, E. (1968). *The experience of the Skin in Early Object Relations*. *International Journal of Psychoanalysis*, **49**, 484-486.
- 藤山直樹 (2002). 可能性空間 小此木啓吾 (編) 精神分析事典 (p.69) 岩崎学術出版
- 文山知紗 (2020). 発達障害に関する描画研究の概観—風景構成法に焦点をあてて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **66**, 193-204.
- 平井正三 (2016). 解題—子どもの自閉症への精神分析的アプローチ Barrows, K (2008). *Autism in Childhood and Autistic Features in Adults* (pp.303-311) London: A Psychoanalytic perspective.
- (ケイト・バロウズ (編) (2016) 平井正三・世良洋 (監訳). 自閉スペクトラムの臨床 大人と子どもへの精神分析的アプローチ 岩崎学術出版)
- 伊藤恵子・田中真理 (2006). 指示詞コ・ソ・アの理解からみた自閉症児の語用論的機能の特徴 発達心理学研究, **17**(1), 73-83.
- Jung, C.G. (1921). *Psychologische Type*. Zürich: Rascher.
- (林道義 (訳) (1987). タイプ論 みすず書房)
- 加地雄一 (2012). 自閉症の「発見」と精神分析 東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部一, **19**, 21-27.
- Kanner, L. (1943). *Autistic disturbances of affective contact*, *Nervous Child*, **2**(3), 217-250.

- 河合俊雄 (2010). 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社
- 河合俊雄・田中康裕 (2013). 大人の発達障害の見立てと心理療法 創元社
- Meltzer, D.・Bremner, J.・Hoxter, S.・Weddell, D.・Wittenberg, I. (1975). *Explorations in Autism A Psycho-Analytical Study*. London: Cathy Miller Agency
- (平井正三 (監訳) (2014). 自閉症世界の探求—精神分析的研究より— 金剛出版)
- 長野真奈 (2013). 風景構成法に見る大人の発達障害の心的世界 河合俊雄・田中康裕 (編) 大人の発達障害の見立てと心理療法 (pp.166-183) 創元社
- 中久喜雅文 (2002). 反復強迫 小此木啓吾 (編) 精神分析事典 (p.402) 岩崎学術出版
- ニキ・リンコ・藤家寛子 (2004). 自閉っ子、こういう風にできてます! 花風社
- 小野次朗・上野一彦・藤田継道 (編) (2010). よくわかる発達障害[第2版]—LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガー症候群— ミネルヴァ書房
- 佐竹真次・小林重雄 (1987). 自閉症児における語用論的伝達機能の研究: 終助詞文末表現の訓練について 特殊教育学研究, **25** (3), 19-30.
- 関根剛 (1992). 性格 (ユングタイプ論) 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 (pp.171-174) 培風館
- 多田昌代 (2012). 自閉症スペクトラム障害の精神分析的アプローチ: Tustin の仕事をめぐって 京都大学カウンセリングセンター紀要, **41**, 35-46.
- Tustin, F. (1972). *Autism and Childhood Psychosis*
- (齋藤久美子 (監修) 平井正三 (監訳) (2005). 自閉症と小児精神病 創元社)
- Tustin, F. (1994). *Autistic children who are assessed as not brain-damaged*, *Journal of Child Psychotherapy*, **20**, 103-131.
- Wing, L. (1996). *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. London: Robinson Publishing.
- (久保紘章 (訳) (1998). 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック 東京書籍)

(臨床心理学コース 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2020 年 8 月 30 日、改稿 2020 年 11 月 10 日、受理 2020 年 12 月 7 日)

自閉スペクトラム症における「つながり」に関する一考察

文山 知紗

本稿は、現在提唱されている様々な自閉スペクトラム症の理論について、「つながり」という観点から見直すことで、自閉スペクトラム症の新たな見方を提供することを目的とした。精神的な観点から自閉スペクトラム症を理論化した Meltzer や Tustin は、付着同一化や自閉対象という言葉を用いて、自閉スペクトラム症者の外的対象とのありかたを「密着したもの」とであると考へた。またユングの時代には自閉症という概念はなかったものの、それと類似する内向型を検討すると、自閉スペクトラム症にはつながりの断絶という特徴があるのではないかと考へられた。それらの概念を事例の中でも見るために、自閉スペクトラム症の当事者の著作を用いて事例検討を行った。そこでは、自分の身体とところのつながりの不全、思考のつながりの独特さ、他者とのつながりの難しさ、物事における部分的で深いつながりのありようがみとれた。今後はこの「つながり」という観点について、実証的に検証していく必要があるだろう。

A Study on "Connection" in Autism Spectrum Disorder

FUMIYAMA Chisa

This paper aimed to provide a new perspective of autism spectrum disorder by reviewing theories currently advocated from the viewpoint of "connection." Meltzer and Tustin, who developed theories about autism spectrum disorder from a psychoanalytic perspective, use the words "adhesive identification and autistic object" to describe how people with autism spectrum disorder relate external object. In addition, although there was no concept of autism in Jung's era, a similar study of introverts suggested that autism spectrum disorder may have a characteristic of disconnection. To observe these concepts, we conducted a case study using the works of people with autism spectrum disorder. The results indicated a lack of connection between body and mind, uniqueness of the connection of thoughts, difficulty connecting with others, and partial and deep connection to things. In the future, it will be necessary to empirically verify this "connection" perspective.

キーワード：自閉スペクトラム症、つながり、分析的概念

Keywords: Autism Spectrum Disorder, Connection, Analysis concept